兵庫県加東郡滝野町方言における身体感覚を表すオノマトペ

黒崎　良昭

はじめに

1．調査対象地：滝野町は兵庫県南部のほぼ中央にあり、加古川の中流域に位置する。海岸部明石市から北へ約30キロ、町の中心部を国道 175号線が通っている。中国自道車道滝野・社インターチェンジを町内に持ち、工業団地等の誘致により、近年とみに都市化が進んでいる。

2．調査年月日：平成３年10月４日

3．方言話者：梶原ちずゑ（大正15年６月生まれ、65歳）

4．調査者・調査場所：黒崎良昭、話者自宅

5．調査方法・調査時の様子：事前に調査用紙を渡し、回答を準備してもらった。調査は、一問一答式で行ったが、滝野町方言は調査者の生活語でもあり、かなりつっこんだ質問が可能であった。

Ⅰ　全身の感覚

1－1．快不快　スイット　サッパリ（サッパリ）

○アセオ　カイタサカイニ　フロ　ハイッテ　スイット　シタ　ワー。（汗をかいたから風呂に入ってさっぱりしたわ。）

同様の場面で「サッパリシタ」も使うが、主に男言葉である。また、女性の場合も美容院でカットをした後などは、「サッパリシタ」を使う。

1－2．寒さ　ガタガタ（ガタガタ）　ブルブル　ゾクゾク（ゾクゾク）　スースー　ドードー

寒さで震える場合は、「ガタガタ」（ガタガタ）を使う。また、「ブルブル」も使うが、「アノ　ヒト　ブルブル　フルエトッテヤ　ワ。」（あの人は<寒さで>ぶるぶる震えていらっしゃるよ。）のように他人の場合か、「アノ　トキ　ブルブル　フルエタ　ナー。」（あの時はぶるぶる震えたね。）のような過去の出来事を表現する場合に使う。風邪をひいて身体の中から寒気がする場合は、「ゾクゾクスル」（ゾクゾクスル）を使い、衣類や布団の隙間から冷たい風が入ってくるような場合は、「スースースル」を使う。「ゾクゾク」に比べて「スースー」の方が、寒さの度合は弱い。古い形に「ドードースル」もあるが、現在では使わないとのことである。

1－3．熱さ　ホーンワカ　カッカ　ホカホカ

酒を飲んで身体が少し暖まった場合は「ホーンワカ」を使う。飲み慣れない酒を飲み、ほのかに酔った感じの場合は「ホカホカスル」と言い、酒気が十分に身体に回った場合は、頭や顔が「カッカスル」と言う。

Ⅱ　皮膚の感覚　　ヒリヒリ　ベタベタ　ムズムズ　モゾモゾ　カサカサ　ガサガサ
スベスベ　ツルツル　ヒリヒリ　ズキズキ　ズキンズキン

日焼けの場合は背中が「ヒリヒリスル」と言う。汗で背中が濡れた場合は、背中が「ベトツク」、または背中が「ベタベタヤ」と言う。汗で「ベトベトヤ」と言う場合は、「カワニ　ハマッテ　ラクガ　ベトベトヤ」（川にはまって服がべとべとだ。）のように、濡れた衣類の形容となる。

衣類と背中の間に何か入って這い回っている時は「モゾモゾスル」と言い、不快感を与える何かが衣類に付いてむずがゆい時には「ムズムズスル」と言う。

空気の乾燥等で肌が乾き切った場合は「カサカサニナッタ」と言い、それが特にひどい場合や手が荒れた場合は、「アノ　コ　ガサガサノ　テー　シトッテヤ」（あの子はがさがさに荒れた手をしていらっしゃる。）のように言う。

温泉に浸かった時には肌が「スベスベスル」と言い、また「ツルツルニナッタ」とは言うが、「ツルツルスル」とは言わない。

擦り傷を負った場合、軽い表面的な痛みは「ヒリヒリスル」と言う。その傷が重く、痛みを奥に感じる場合は「ズキズキスル」と言い、さらにひどい場合は「ズキンズキンスル」を使う。切り傷、打ち身、やけどの場合も同様に、「ズキズキ」「ズキンズキン」を使う。できものが膿んできた時には、「ズキンズキンスル」と言う。

Ⅲ　頭部の感覚

3－1．頭　　クラクラ　ズキズキ　ズキンズキン　ガンガン　カッカ　カッカカッカ

○メマイガ　シテ　メノ　マエガ　クラクラ　スル　ワー。（目まいがして目の前がくらくらするよ。）

頭痛の場合、痛みのひどさに応じて、「ズキズキ」＜「ズキンズキン」＜「ガンガン」と使い分ける。二日酔いがひどい時は「ガンガン」を使う。

3－2．顔面　　ボーッ

○メンセツノ　トキ　カオワ　ボーット　スルシ　シマイニ　モー　アタマガ　カッカカッカ　シテッテ　ナー。（面接の時に顔はぼっとするし、しまいには頭がかっかしてきてね。）

「カッカスル」のは顔ではなく頭であり、顔は「ボーットスル」または顔が「ホテル」と言う。

3－3．目　　ショボショボ　ゴロゴロ

目が疲れた場合は「ショボショボスル」を使い、目に何か入った場合は「ゴロゴロスル」を使う。突然目に強い光が入った時などは「チカチカスル（チカチカスル）

」と言い、煙で目がしみる場合は「ショボショボスル」を使わず、「ケムトーテメーガ　シュンデ　イタイ。」（煙くて目がしみて痛い。）のように言う。

3－4．耳　ジーン　キーン　ジュクジュク

○アー　ヤカマシイ。ミミガ　ジーント　スルシ　アタマガ　ガンガン　スル。（ああうるさい。耳がじんとするし、頭ががんがんする。）

金属性の音の場合は、耳が「キーントスル」を使う。

○ミミダレガ　デテ　ミミン　ナカガ　ジュクジュク　スル。（耳垂れが出て耳の中がじくじくする。）

3－5．鼻　ムズムズ　グズグズ　グスグス　クスクス　クシュクシュ　グシュグシュ　ツーン

鼻の中が痒い時には「ムズムズスル」を使う。風邪のせいで鼻の中が気持ちの悪い場合は「グズグズ」「グスグス」「クスクス」「クシュクシュ」「グシュグジュ」等、多様な表現がなされる。

3－6．口

（口全体）　ネバネバ　ネチャネチャ　モチャモチャ

口のなかで糸を引くような食べ物、納豆やおくらを食べたような時には、口の中が「ネバネバスル」と言う。飴などを食べた場合は「ネチャネチャスル」と言う。

甘いものを食べ過ぎて口の中が気持ちの悪い場合は、「モチャモチャスル」または「モチャツク」と言う。

（歯）　ガチガチ　シクシク　チクチク　ズキズキ

寒さに震える場合は、歯が「ガチガチナル」を使う。

○ハガ　シクシク　スンネン。ハイシャサン　イカナー。（歯がしくしく痛む。歯医者へ行かなければ。）

歯痛の場合、「シクシク」「チクチク」「ズキズキ」と順に痛みが増す。

（舌）　ピリピリ

3－7．喉　カラカラ　イガイガ　ヒーヒー

あくの抜けていない筍を食べたような場合、喉が「エグイ」と言う。籾殻を燃した時の煙が喉を刺すような時には、「ノドガ　ハシコーテ　イガイガ　スル。」（喉が痒くていがいがする。）と表現する。「イガイガ」は痒い感覚を表す言葉で、背中の場合も「イガイガスル」と言う。

Ⅳ　胴体の感覚

4－1．肩　コッキンコッキン　グリグリ　ゴリゴリ　コリコリ

肩の凝りをほぐすために首を左右に傾けた時、あるいは回した時に聞こえる音を上記のようにさまざまに表現する。実際には、音は首筋から聞こえるようである。

4－2．胸　ドッキンドッキン　ドキンドキン　キューッ　キュッ　ムカムカ

○アー　オトロシカッタ。マダ　ムネガ　ドキンドキン　シトル　ワー。（ああ恐

ろしかった。今でも胸がどきどきしているよ。）

走った後は、胸が「ドッキンドッキンスル」と言う。

悲しい場合は胸が「キューットスル」と言い、「キューットシメツケラレル」とは言わない。

4－3．腹

（空腹）　グルグル

（満腹）　タプタプ（タプタプ）　ダプダプ（ダプダプ）　ポンポン

お茶などを飲み過ぎた時には「タプタプスル」または「ダプダプスル」と言う。

○アンマリ　ゴットーヤッタカラ　タベスギテ　オナカ　ポンポンデ　ズツナイワ。（あんまり御馳走だったから食べ過ぎでお腹がぱんぱんになってつらいよ。）

（腹下し）　グルグル　ゴロゴロ　ピーピー

軽症の時は「グルグル」「ゴロゴロ」を使い、重症の時は「ピーピー」を使う。

4－4．胃　シクシク　キリキリ

痛みの弱い場合は「シクシク」を用い、強い場合は「キリキリ」を用いる。

4－5．尻　モソモソ　モゾモゾ

居心地の悪いような場合は、尻が「モソモソスル」と言う。時に「モゾモゾ」とも。尻が「ムズムズ」は、実際に尻が痒い場合に用いる。

V　手足の感覚

（手）　ブルブル

（足）　ガクガク

（その他）　ヌルーッ

○ナンカ　ヌルッート　シタ　モンガ　テーニ　サワッタ。キショクワルー。（何かぬらっとしたものが手に触った。気持ちが悪い。）

VI　関節（骨）の感覚　ポキポキ

指の関節を折り曲げた時に「ユビガ　ポキポキ　ユー」と表現する。

○まとめ

語形においては共通語とあまり大きな差異を認めることが出来ない。ただ、前述したように、「鼻」の感覚を表す表現や「口」の感覚を表す表現等に、共通語に比べて多くのバラエティーが見られる。

当地方言の特徴の一つに、「ミータイ（見たい）」のような長音化や「ジッキニ（直に）のような促音添加が挙げられるが、オノマトペにおいても、「ポーッ」「キューッ」などの長音化や、「コッキンコッキン」「ドッキンドッキン」などの促音添加が見られる。

共通語と比べて大きな違いの見出だせるのは、アクセントであろう。共通語アクセントにおいては「頭高」が大部分を占めるのに対して、当地方言においては「中高」、特に4音節語の「○○○○」の形が際立っている。それも、共通語＜ヒリヒリ、モソモソ、スベ

スペ、ガンガン>が、当地方言<ヒリヒリ、モソモソ、スペスペ、ガンガン>のように、はっきりとした対応を見せている。もちろん、同じアクセントの語<ペタペタ（ニナル）、チカチカ、キリキリ>等もあるが、その数は少ない。

同一語に二つの異なったアクセントが聞かれるものがいくつかあった。例えば、寒さを表す「ガタガタ」「ゾクゾク」である。「ガタガタ」「ゾクゾク」は共通語アクセントであり、「ガタガタ」「ゾクゾク」は当地のアクセントである。話者の内省によれば、当地のアクセントで発音する方が、共通語アクセントで発音するのに比べて、厳しい寒さが表現できるとのこと。これは一方では、生活に密着した生活語の、借り物にはない力強い表現力を如実に表したものといえよう。と同時に、もう一方で、共通語アクセントが当地方言のオノマトペにも影響を与えていることが分かる。とは言え、これらは今回の調査語彙全体で見ると、ごく一部分に過ぎない。当地方言のオノマトペにおいては、「○○○○」型アクセントが中心を占め、共通語アクセントとはっきりと対立していると言ってよいだろう。

（くろさきよしあき　兵庫県立社高等学校）